講義

H. Möllgarrd 氏ノ結核化學的療法（終）

渡邊義政

概言

此ノ問題ニ就イテ既ニ本誌第四卷第一號ニ於テ述ベテ置イタガ丁抹方面ノ實驗ヤ英佛獨ノ各委員會ノ報告ガ發表サレタ。其レヲ今簡單ニ申述ル事トスル。

サテメルゴー（Möllgarrd）教授ト仲ノ惡イ人デコーペンハーゲンノ獸醫學校ニ教職ヲトッテ居ルバンク氏ハ前ニ申シタ通リ十六例ノ家兎實驗ノ結果カラ「サノクリジン」ノ效力ノナカッタ事ヲ公表シテメルゴー教授ノ反駁ニ遭イ氏ハ其所デ更ニ第二第三回ト實驗ヲ重ネテ牛二十二頭ノ詳細ナル觀察ノ結果治療及ビ對照共差異ヲ認メナイ卽チ治療ノ分ニ結核變化ノ輕イノガアレバ對照ノ方ニモ同樣ニ甚ダ輕イノガアッタ、又タ特殊血清ノ作用ハ少シモ認メラレナイ尙ホ試驗管內發育防止力ハメルゴーハ十萬倍ト申シテ居ルガ人型三株牛型五株ノ實驗デハ何レモ五千倍デ教育シテ居ルト述ベテ居ル其所デメルゴー教授ハ更ニ反駁シテ氏ノ「サノクリジン」使用分量「プロ」瓩一・〇—一・五瓩ノ微量デアル其レデ治療的效果ノナイ事ハ既ニ自分ガ述テ置イタ次第デアル又血清ノ作用ノナカッタ事ハ適當ノ注意ヲ缺イテ中毒死ニ近キ者ニ使用シタカラデアル、本血清ハ既ニ百二十例ノ實驗デ有效デアリシ事ヲ證明サレテ居ルト云ヒ尙ホ蛋白尿ハ金中毒ト菌毒素ニ依ルモノトハ區別シテ考フル可キデアル健康血清ハ蛋白尿ニ何ノ影響ヲ與ヘナイガ本免疫血清ハ蛋白ノ出現ヲ防止スル作用アリ而シテ血清モ五十七度ニ熱スルト其作用ヲ失フ是レニ依ッテモ特殊血清デアル事ガ認メラレルトマドセンヤメ

ルシ等ノ說ヲ引用シ又バンク氏ハ中々眞面目ニ研究サレタガ强毒ヲ以テ感染シタ動物試驗ハ治療ノ限界ヲ蹈破シテ居ル斯ル事ハ自然界ニアリ得可キカ、只ダ動物試驗ニ於テノミナシ得可キデアル又ハ家兎ノ如キ「サノクリジン」ニ對シテ抵抗力ナキ動物ヲ試驗スル事ノ不合理デモアリ而シテ十四日乃至二十一日デ死ヌ樣ナ急性結核ハ丁度人ノ急性結核性腦膜炎ニ相當シ「サノクリジン」ヲ使用ス可キ例デハナイ尙ホ試驗管內ニ於ケル結核菌發育防止現象デモ氏ノ技術ヲ疑ッテ居所ル其所デ又モバンク氏ハ論ジテ曰ク實驗ニ供シタ結核菌二株ハ何レモメルゴー氏ヨリ分與ヲ受ケシモノデ其內ノY菌株ハ牛ニ注射シタ所四〇%ハ結核ニ感染シテ居ラナイ斯樣ナ感染狀態ヲ以テ「サノクリジン」ノ治療價値ヲ判定スルコソ不合理デアル故ニ一樣ニ結核變化ヲ起ス程度ニ菌ヲ使用シタノデ殊更强毒株ヲ選ンダノデハナイ又「サノクリジン」ガ結核菌ヲ殺サヌト云フ自分ノ實驗ハ是非承認シテ貰ヒ度イ、其レハ結核デ死ンダ家兎ノ脾臟ヲ一%ノ「サノクリジン」溶液デ乳劑ニ作リ十一日間室溫ニ置キタル後チ健康「モルモット」ニ注射シタ所立派ニ結核變化ヲ呈シタ又メルゴー氏ノ株ヲ使用シタ事ガ惡イトスレバ氏ノ實驗モ同一結果ニ歸ス可キデアル、氏ハ「ショック」ヲ結核菌毒ニ因ルト謂ヘルガ自分ハ金中毒ト考ヘテ居ル、又「サノクリジン」ハ結核化學的療法トシテハエールリッヒ氏ノ意義ヲ全然異ナリタル路ヲ行クモノデアル。次ニ臨牀方面ノ報告ヲ見ルニポアンデッケル氏ハ開放性結核四十例ニ就テ治療ヲ施シタルニ金中毒トシテ胃腸障碍蛋白尿皮膚變化ヲ呈シ病竈反應ハ刺戟症狀デアル而シテ治療ノ結果三十七例乃十七例ハ良クナリタルモ此レハ單ニ他ノ療法ヲ施ス丈デモ良クナル事ガアル、免疫血淸ハ作用ヲ有セズ卽チ血淸〇・一瓩中ニ舊「ツベルクリン」〇・一瓩ヲ加ヘ三十七度ニ一時間置キテ皮內反應デ試驗シタル抗體ヲ證明シ得ナカッタ。

チン氏ハ「サノクリジン」ヲ應用シタ所比較的良キ結果ヲ得タガ結核ノ特殊治療劑ニ非ラズト云ヘリヂャンセン、ウェベル氏ハ十六例ノ開放性結核ニ應用シタガ一例モ效果ヲ認メズ金中毒ヲ起シタ丈デアリ免疫血淸ノ作用モ認メル事ガ出來ズト云ヘリコッホ、フリッ氏ハ以上ノ諸氏ト同ジク十例ノ患者ノ經驗デ非特異劑デアル事ヲ立證シテ居ルブラーヌ氏ハ大人ニ「サノクリジン」一回量〇・五乃至一・〇瓦ヲ限度トシ使用スレバ副作用ナク總量五・五乃至七・五瓦ヲ注射シ得而シテ特殊血淸ノ必要全クナシ肺結核十八例ノ他腦膜炎、格魯布性肺炎、癌等ニ使用シタ、其肺結核十八例中六例丈臨牀的所

見ガ良クナツタ樣ニ思ハレル卽チ解熱シタ者三例熱症狀去ツタ者三例喀痰ノ減少シタ者六例其レハ喀痰中結核菌ヲ見ザルニ至ツタノデアル又タ「サノクリジン」注射ニ依ツテ蛋白尿ヲ起サヌ者ハ結核ニ非ラザルト考ヘルメルゴー教授ノ說ハ承認出來ズ何トナレバ結核ノ全クナキ無熱デアル「カルチノーム」ノ患者三例ニ「サノクリジン」一・〇瓦ヲ注射シタルニ皮疹ヲ呈シタ者二例三%ノ蛋白尿ヲ來シタ者三例デ全ク結核ト同樣ノ反應ヲ呈シタノデアル此ハ「サノクリジン」自身ノ中毒ト考フル方ガ至當デアルカラ本療法ハ結核ニ對シ非特殊性刺戟療法ト謂フ可ク從ツテ微量ヲ用ユ可キデアルト云ヘリヂャンセン氏ハ「サノリクジン」療法ヲ施シタ肺結核二十例中十一例ハ比較的大量（〇・五瓦以上）九例ハ甚ダ微量（〇・一瓦）ヲ使用シタノデアル而シテ十一例ハ良キ傾向ヲ取リタルモ其ノ內ノ五例ハ人工氣胸ヲ併用シタノデアル、特殊血清ハ全ク效力ガナイ、「サノクリジン」ハ結核ノ特殊治療劑デナクシテ甚ダ危險ヲ伴フ金屬毒デアルト云ヘリ。

S 治療ノ結果

	良	不良	變化無	死亡	計
Poindecker	17	4	13	0	34
Zinn	12	4		2	18
Jansen u. Weber.	0		16		16
Blane	6	0	8	4	18
Jansen	4	2	5	2	20
計	46	7—良キ傾向 52		8	108

以上ノ諸報告ヲ綜合スレバ次ニ示ス如キ結果ヲ得タノデアル。

卽チ百〇八例中良キ者或ハ良キ傾向ヲ取リタル者四十六例、變化ナキカ不良トナリシ者五十二例、「サノクリジン」ノ爲メ直接又ハ間接ニ死シタ者八例デアルカラ臨牀的方面ハ決シテ不良ノ成績デハナイガ何レモ有毒デアルカラ注射分量ハ微量ヨリ初メ而シテ充分ノ注意ト適當ナル症例ヲ選ブ事ガ必要デアル、ウエリチ氏ゾンメルフェルド氏ハ「サノクリジン」ノ直接作用ヲ試ム可ク狼瘡六例ニ腔結核三例喉頭結核三例骨及關節結核八例ニ自ラ實驗シタ結果「ループス」ノ周圍ニ〇・五%ノ「ノボカイン」約一〇瓩ヲ先ヅ注射シ後チ二乃至三%ノ「サノクリジン」溶液一〇乃至一五瓩ヲ注射シタ又〇・五%ノ「ノボカイン」液デ「サノクリジン」ヲ溶解シテ前記分量ヲ注射シタ所「ループス」八例ハ六週間內ニ治シタガ內一例ハ六ケ月後新結節ヲ生ジタ喉頭及咽頭結核ノ各三例ハ良イ樣デアルガ全治ニ至ラナイ、關節結核四例ハ一%「サノクリジン」液五〇乃至一〇〇瓩ヲ關節周圍ニ注射シテ二例ハ良キ經過デ治療シタガ他ノ二例ハ不充分デアツタ、本實驗デハ「ループス」ニ最モ良ク他ノ例ハ然ラズ、氏ハ結論シテ曰ク結

核ニ對スル「サノクリジン」療法ハ全身的ニ働クト云フヨリ一ノ局所療法デアッテ而シテ結核菌ニ作用スルモノト考フルヨリハ組織ニ作用スルモノト解スルヲ至當トス。

千九百二十六年四月二十五日ヨリ二十七日ニ至ル三日間 H.R Dean 研究所デ開カレタ結核會議デハダイレ、クムミンス氏ハ「サノクリジン」ハ使用シテ良イ事モアルガ又屢〻危險ガ伴ッテ來ルカラ誰モ用フル事ガ出來ルモノデナイ、本劑ハ結核菌ヲ崩壞シ結核毒ヲ遊離スル事モアルカモ知レナイガ金製劑ノ中毒ヲモ考ヘナケレバナラナイト云ヒヘース氏ハ二十八名ニ使用シタガソンナ危險ヲ經驗シナイト云ヘリ。

佛國方面ノ研究ハ Euvre de la tuberculose ノ學術的研究會議デ附議セラレタ結果ニ依ルトブサックソン氏ハ二十六例中唯ダ二例丈良キ結果ヲ得タ、「サノクリジン」治療中ニ起ル中毒症狀ハ全ク金製劑自己ノ毒作用デアル、カルメット氏ハ「サノクリジン」ニ依テ結核菌ノ崩壞スルコトハ試驗管內ニテハ認ムル事ガ出來ナイ又結核毒素ノ遊離並ニ免疫血清中ノ抗「ツベルクリン」物質ナド承認出來ズト斯ク佛國方面ノ研究ハ「サノクリジン」ニ對シ甚ダ不利デアルガ獨逸方面ノ報告ハ之ニ反シ概シテ有利デアル卽チノイフェルド氏ハ「サノクリジン」ハ有毒デアルガ使用シ得ラル、可能性ヲ述べ而シテ金製劑デ治療ヲ惹起スルニハ少ナクトモ人體ニ害ヲ與ヘナイ程度ニ使用ス可キデアル牛九頭ノ實驗カラシテ一定ノ條件ヲ要シテコソ治療ノ上ニ成效ス其レヲ人體ノ上ニモ考フ可キデアルト云ヘリ、クラウス、クッエルニイ、フリードマン氏等ハコーペンハーゲンノ學者ノ說ヲ引用シ氏等ノ意見ハ「サノクリジン」ハ一般家庭醫ノ應用シ得ルモノニ非ラズトナセリ、クッエルニー、ドウス、オーピス氏等ハ結核性腦膜炎ノ三例粟粒結核ノ三例肺結核ノ六例ニ使用シテ肺結核一例丈ガ良キ結果ヲ收メテ體重增加シタガ他ノ十一例ハ盡ク死ンダヘリウス氏ハ約五十%良キ結果ヲ得タト云イ使用分量ハ大人ニ〇・二五乃至〇・五瓦ヨリ始メタノデアルガ血清ハ全ク必要ヲ認メナイ而シ本劑ハ結核ノ特殊治療劑ニアラズシテ他ノ意義ニ於テ用ヒラレルモノデアル、ブロノウ、ランゲフエルド氏ハ牛型菌〇・〇一瓩ヲ家兎靜脈內ニ注射シ一乃至二ケ月ニテ斃ス程ノ强毒牛型結核菌株ヲ體重百乃至百五十瓩ノ牛靜脈內ニ一〇・〇瓩注射シテ「サノクリジン」ヲ「プロ」瓩〇・〇三乃至〇・〇八瓦ヲ使用シタガ四乃至五週後ニ死セリ、其所デ第二回實驗ニハ第一回實驗株ト同一菌ヲ同一分量牛ノ皮

下ニ注射シ「サノクリジン」「プロ」瓩〇・〇一乃至〇・〇二瓦ヲ使用シタ對照ノ三頭ト治療ノ六頭ハ三十七日内ニ死ンダガ治療ノ一頭ハ尚ホ生存シテ居ルクレンペレル氏ハサロモン、アーレンスチール、ビール氏等ノ助ヲ得テ四十二例ノ人體ニ實驗シタ結果急性症五例慢性症三十七例中現在治療中モノモ七例ヲ除クト良クナリシモノハ急性症デ一例、慢性症デ三例デアツタ又タ特殊血清ノ效力ヲ決定スル爲メ粟粒結核ノ一例慢性肺結核空洞形成ノ一例急性結核性肺炎ノ一例ニ「サノクリジン」ト血清トヲ使用シタ所中毒症狀ヲ中和スル事出來ナカツタ故ニ「サノクリジン」ヲ使用スルナレバ大人ニ〇・一乃至〇・二五瓦ノ微量ヨリ始メ副作用タル中毒症狀ニ注意ス可シ其ノ副作用ハ黄疸（注射後八日位）關節腫脹疼疼、發疹（丹毒性皮炎）腎臓炎等デアル尚ホ氏ハ本劑ハ間接的ニ作用スル金製劑アデルト云ヘリ之ニ對シチン氏ハ一ケ年間約十六例ノ實驗デ二、三期ノ患者十二例ガ治癒シテ居ルコンナ事ハ他ノ療法デハ認ムル事ガ出來ナイ又タ結核毒作用竝ニ免疫血清ノ效力ヲ全ク是認シテ居ルノデアル、ウンベル氏ハ男女十三例ノ實驗ノ結果甚ダ良キ成績ヲ擧ゲテ居ル卽チ五〇％以上ハ臨牀上良ク内男ノ三例ハ喀痰中ニ結核菌ヲ認メナイ樣ニナツタツマリ分量ニ注意ヲナシ微量ヨリ始メ適應症ヲ選擇ス可ク滲出型ハ概シテ良キ結果ヲ得ルト云ヘリ、ゾンチンフヘルト氏ハ肺結核二十七例ニ「サノクリジン」ヲ使用シタ所五例ハ死シ一例ハ喀痰中結核菌ヲ認メザルニ至ツタガ他ハ變化ヲ呈サナカツタゴールトシャイテル氏ハ各方面ニ於ケル「サノクリジン」實驗報告ヨリ立脚シテチン氏ノ所論ヲ信ズル能ハズト云ヒクレンペレル氏ノ云ヘル如ク本劑ハ直接結核菌ニ作用セズ組織ニ生物學的反應ヲ惹起シ其レニ由テ治癒ヲ促スナラント又喀痰中結核菌ヲ證明シ得ナクナツテモ肺臓中ニ結核菌ノ存在ヲ否定スル事ガ出來ナイクレンペレル氏ハ獨逸委員會ノ各報告ヲ綜合シテゾンチンフヘルト、ゴールドシャイデル氏等ハ喀痰中ニ結核菌消失シタト云ハレルガ良クナリタル例デモ結核菌全ク消失シタ事ナシ「レントゲン」像デ小ナル空洞ノアルモノハ又依然トシテ空洞トシテ存在スルカラ斯ル例ニ於テハ「サノクリジン」ノ必要ガ疑ハレルチン氏ヤウンベル氏ノ報告ノ樣ニソウ良クナルカ否カ又タ他ノ療法デハドウカト云フ事ガ甚ダ疑問デアルチン氏ハ「サノクリジン」注射ノ結果好「エオジン」細胞多クナツタト申シテ居ルガ「ツベルクリン」デモ同樣ノ結果ヲ來スノデアルウンベル氏ガ「サノクリジン」〇・〇五瓦ノ微量デ有效的作用ヲ示スト云ハレル事ハ本劑ガ直接殺菌物質ニ非ラザル事ヲ立

肺結核ニS治療ノ結果

		良	不良	變化無	死	治療中	計
Czerny. u. Opitz		1	0	0	5		6
K. Henius.		4	3	1	0		8
Klemperer.	急性	1	0	0	4		5
	慢性	3	13	2	12	7	37
		(良クナラザリシモノ)					
Zinn.	2—3期	12	4		0		16
Umber.	男	4	3				7
	女	3	3				6
Sonnenfeld.		1	0	0	4	22	27
		29	22	7	52	29	112

證シテ居ルノデアル其ノ作用ハ丁度「ツベルクリン」ヤ「クリゾールガン」ヤ「トリバール」ト同樣デツマリ「サノクリジン」ハ結核ノ治療劑ト云ヒ得ルガメルゴー氏等ノ提言ハ是認シ難イ斯ク獨逸派ハ概シテ有效デアルガ如クニ述ベテ居ル今之ヲ一括スレバ上記ノ如ク一程度ノ效ヲ認メテ差支ナイノデアルガ決シテ結核ノ特殊化學的療法ト申ス可キデハナイ。

次ニ英國委員會ノ豫報ハ既ニ述ベタ通リデ其ノ後第一、第二ノ報告ガ Lancet u. Britischmed. Jaur. 1926 ニ發表サレタノデアルカーミンス氏ハ委員會(M. R. C.)ノ委托ヲ受ケテ家兎ノ實驗的結核ニ「サノクリジン」ハ如何ニ作用スルヤヲ試驗スル手段トシテ

結核家兎ニ「サノクリジン」ヲ注射スルニ依リテ「ツベルクリン」樣「ショック」ヲ起シ其ノ「ショック」ハメルゴー氏結核血清ニテ防禦シ得ルヤ、竝ニ有毒結核菌ハ家兎ノ人爲的感染ニ際シ分量的感染差ヲ呈スルガ尙ホ「サノクリジン」ヲ注射スル事ニ依リテ對照タル結核家兎トドレ丈差ガ出來ルカヲ試ミタノデアル。

以上實驗ノ結果メルゴー氏結核血清ハ「ショック」ヲ防禦シ得ズ强毒菌ヲ用ヒテ感染シタ家兎ニ「サノクリジン」ヲ使用スレバ對照家兎ヨリ一層早ク斃レルガ弱毒牛型菌デ感染サセタ家兎ハ「サノクリジン」注射ノ分對照動物ニ比較シ長ク生存シテ居ル對照家兎ハ一頭ヲ殘ス他五乃至七ケ月ノ初メニ結核デ死ンデ居ルガ「サノクリジン」療法ヲ施シタ家兎ハ九ケ月モ生存シテ居リ尤モ對照家兎ニモ同樣ノモノ一頭アツタ結核變化ハ對照家兎ノ方著明デアツタ、此ノ實驗カラシテモ人體ニ應用スルニハ結核ノ早期ニ施ス可キモノデアル英國 M. R. C. ノ第一第二回報告ハ臨牀的方面ノ綜合デ前ニモ申シタ通リ一定ノ病院又ハ「サナトリウム」ニ託シテ實驗シタ事ハ次ノ通リデアル。

St. Bartholomen's Hospital.
（肺及腸結核ニ用ヒ效不明）
London Hospital.
（結核菌ヲ見出サヌ樣ニナツタモノ一例他ハ良クナシ）
Mary's Hospital.
（結核菌ヲ喀痰中ニ見出サナクナリシモノ二例アリシ）
St. thomas's Hospital,
（效力ヲ全ク認メズ）
Univercity Collage Hospital.
（症狀後退シ臨牀上治シタルモノ二例）
Giys Hospital.
（中毒ヲ呈スル故少量用ヒタリト云フ丈）
Brompton Hospital.
（纖維性ニ效力ナシ）
Warwickshis King Edward-VII Memorial Sanatorium.
（26例ニ使用シタ）
Wales.
（病院又ハサナトリユームノ他使用出來ズ）
Royal infermary Edinburgh.
（免疫血淸效力ナシ）
Edinburgh Publie Health department.
（肺結核ニ六回注射シタ）
Northern Ireland Bellast Municipal Sanatorium.
（良キ結果ノ者二例）
Forster Areen Hospital.
（結核菌ヲ見出サザルニ至ツタモノ二例他ハ變化ナシ）
Royal Victoria Hospital.
（肺結核四例ニ使用シ其ノ內一例ハ中毒症狀ヲ呈シタ故メルゴー氏血淸ヲ使用シタルモ效ナク死ス）

此ノ報告全部此所ニ摘錄スルコトハ蛇足ノ感ガアルカラ省略シタノデアルガ御覽ニナリ度イ方ハ

Lancet 7, 24, 1926, Vol. CCXI p.53 69 the Gold Treatment of Tuberculosis.

ヲ御開キ下サイ扨テ同委員會ノ第二報告ヲ見ルニ非常ナル注意ヲ以テ「サノクリジン」使用分量ヲ減ジ患者ノ選擇ヲ嚴重ニシタ結果「サノクリジン」治療ノ上ニ於テ其ノ危險ガ除カレテ來タノデアル卽チ第一報告デハ三十例中二例ノ中毒死ガアツタガ今回ハ百四十例中唯ダ一例 Royal Victoria Hospital デ死ンダノデアル而シ危險ハ全ク除カレタト云フ事ニハナラヌ屢〻中毒症狀ヲ呈スルノデアル黴毒ニ「サルワルサム」ヲ使用スル場合ト比較スレバ危險ガ多イ其レ故ニ一般患者ニ使用スルニハ醫學的注意ガ必要デアル一ケ年ノ間ニ於テ最少量ヲ使用シ長キ間隔ヲ置ク事ニ依リテ危險ノ減ゼラレタ事ハセコー、ルルチェン氏等ノ報告通リデル。

結核特殊血淸ハ何等ノ影響ヲ與ヘナイ又「サノクリジン」ハ結核ノ診斷ニナルト云ハレルモフォルニー及ビモウラー (Fournier et Mollaret., Coup Rend. Acad des Sciences 1925 cl XXXI 943 p.) ノ報告デハ彼自身ノ作リシ「サノクリジン模造品 (Asimilar Goldsalt) ヲ人黴毒ニ注射シタ所結核ト同樣ナル反應ヲ呈シタ該反應ハ結核ノ特有反應ニ非ラザル事ヲ立證シタノデアル、此ノ臨牀的方面ノ綜合的觀察デ「サノクリジン」注射ノ結果喀痰ガ減少シ結核菌ガ喀痰中ニ見出シ得ナクナツタト云フ事ハ病院又ハ「サナトリウム」ノ安靜療法ノ結果デ「サノクリジン」ノ效力デナイト云フ者ト效力ニ歸ス可キデアルト二樣ノ報告ガ發表サレタ、以上ノ結果ヨリシテ此ノ「サノクリジン」ヲ使用セント考フル人ハ非常ニ細心ナ

ル注意ヲ以テ適切ナル患者症例ヲ選擇ス可キデアルト云ヘリ。

結末

既ニ三回ニ亙リ論述シタ所ヲ綜括的ニ申セバ

第一、「サノクリジン」試驗管內現象

覆試者ノ各報告殆ンド全部ガ結核菌發育防止現象ヲ證認シテ居ル而シ其ノ程度ノ差ハ菌株ノ相違ニ依ッテ起ルカラバンク、マドセン等ノ報告一致シナカッタノデアル又タ試驗管內ニ於テ結核菌ヲ殺ス力ハメルゴー教授等ノ說ヲ肯定シ得ナイ。

第二、動物實驗

動物ノ種類竝ニ個體ノ差又タ感染菌毒ノ强弱或ハ「サノクリジン」注射分量等ニ依ッテ甚ダシイ差ガアルカラ常ニ一樣ノ結果ヲ得ル事ハ出來ナイ、メルゴー教授等ノ說ト覆試者ノ成績トハ甚ダ大ナ差ガ生ジテ居ル、バンク氏ノ說或ハ眞ナルカモ知レズ、而シ弱毒菌ヲ以テ感染スレバ「サノクリジン」治療ノ結果ハ良キガ如クデアル其レハ卽チ本劑ノ作用ニノミ歸ス可キモノヤ疑ノ餘地甚ダ大ナリ。

第三、臨牀的應用

英國ヲ初メ獨逸佛蘭西ノ委員會報告ハ主トシテ臨牀的方面ノ觀察デ判斷サレテ居ル、「サノクリジン」ヲ以テ效果アラシムルヤ否ヤト云フ事ハ主トシテ適應症ノ選擇ニ基クカラ之ヲ誤レバ危險ヲ來スカサモナクトモ疾病ヲ增惡セシムル事ハ當然デアル、病機ノ進行セザル殊ニ滲出性ノ肺疾患或ハルーブスノ如キモノニ效果アルガ如シ又病機弱クトモ榮養不良或ハ他ニ併發症ノ有ル場合ハ不良ナル結果ヲ招グ事アル可キト考フルガ至當デアル、注射分量ニ就テモ初メハ餘リ大量ニ過ギタ結果甚ダ危險ガ伴ッテ居ッタ斯ク大量ヲ使用スル事ハツマリ身體內デ結核菌ヲ崩壞死滅セシムルモノト考ヘタカラデアルガ今日斯ル殺菌作用ノナキ事證明セラレタ以上ファーベル氏等ノ提唱スル如ク微量卽大人ニ對シ〇・一瓦ヨリ始メ漸次增量シテ一・〇瓦ヲ限度トスルヲ至當トス。「サノクリジン」注射ニ因リテ中毒症狀タル消化不良、下痢、蛋白尿、

關節腫脹、皮疹、浮腫、黃疸、體溫變化、呼吸困難等ハ盡ク之ヲ金屬中毒症狀ト謂フ可キナリ最早ヤメルゴー氏ノ說ハ何人モ是認スルモノナシ、從テ氏ノ結核特殊免疫血淸ヲ使用セント欲スルモノモナキニ至レリ又タ本特殊免疫血淸中ニハ「ショック」毒ニ對スル抗體ナク又タ菌ノ「ショック」毒スラ疑ハレテ居ル、故ニ「サノクリジン」療法ハ今日ノ立場カラ見レバメルゴー氏ノ提言ト甚ダ大ナル懸隔ヲ有シテ來タ從ツテ化學的療法ナドト考フルハ一年有半ヲ過ギタ夢ニシテ他ノ治療劑ト均シク一ノ刺戟療法ニ過キナイモノデアル。然レドモ臨牀上全然效力ヲ認メザル次第デハナイ恐ク今日現存サレ居ル此ノ種類ノ結核治療劑トシテハ稍ヤ進步シタルモノト謂フ可ク之ヲ應用セント欲スル人ハ結核ノ早期ニ榮養療法ヲ兼子且ツ副作用ヲ呈セザル程度ニ微量ヨリ始ムレバ危險率殆ドナカル可ク、而シテ一程度ノ效果ヲ收ムル事モアルナラン。

日本ニ於ケル本結核新劑調査委員會ノ作業モ殆ンド結末ニ近ヅキタレバ其ノ內ニ詳細ニ發表サレル事デアルカラ本劑ノ眞價ハ其レヲ以テ決定サレル事デアル。

內務大臣諮問ニ對スル結核豫防協會ノ答申

大正十五年四月二十一日御諮問ニ係ル「現行結核豫防法ニ對スル意見如何」ニ就テハ本會當時ノ決議ノ要旨ニ基キ爾來全國聯合團體ノ意見ヲモ徵シ夫々審議ノ結果別紙ノ通リ及答申候也

昭和二年一月十日

日本中央結核豫防會　理事長　男爵　北里柴三郎

內務大臣臨時代理　安達謙藏殿

別紙（御諮問ニ對スル答申書）

現行結核豫防法施行セラレテヨリ既ニ八星霜ヲ閱ミセルモ未ダ結核死者數ノ低下ヲ見ザルノミナラズ結核患者ノ如キハ其受療ノ點ニ於テ便宜ヲ得ルノ途甚ダ困難ナルノ實狀ニ在リ乃チ是等ノ缺陷ニ對スル方策トシテ必要ト認ムベキ要項ヲ擧グレバ左ノ如シ。

（甲）現行法中改正、增補ヲ要スル事項

一、法第二條中法第一條ノ結核患者ヲ診斷シ又ハ其ノ死體ヲ檢案シタル場合ハ「醫師ヲシテ之ガ屆出ノ義務ヲ負ハシムベク」改正セラレタキコト。

（參照）全國聯合團體中此改正ヲ申出デタルモノ實ニ三十四會ノ多數ニ上レリ。

二、法第二條中「結核患者又ハ死者アリタル家ニ於テ消毒ノ資力ナキ場合ニ於テハ患者所在地ノ市町村之ヲ負擔スベシ」トノ條項ヲ設定セラレタキコト。

三、法第三條中左ノ一項ヲ加ヘラレタキコト。

行政官廳ハ必要ト認ムルトキハ前住者移轉後一ケ月以内ニ其家屋ニ居住スル者ニ對シ前項ノ規定ヲ適用ス。

四、法第四條中第一項及第二項中「家族又ハ同居者ニ對シ健康診斷ヲ行ヒ又ハ一定ノ從業制限ヲ附シ得ル樣」改正ヲ加ヘラレタキコト。

五、法第六條中「人口五萬以上ノ市」トアルヲ「市又ハ道府縣」ト改メ且本條ニ依ル「結核相談所」ヲモ併置セシメ得ル樣改正ヲ加ヘラレタキコト。

六、法第八條中ノ「六分ノ一乃至二分ノ一」トアルヲ相當增額セラレタキコト。

七、法第九條中公共團體以外更ニ「私設結核療養所ニ對シテ相當國庫補助ヲ與ヘラル、樣」改正セラレタキコト。

八、法第十二條中「四分ノ一」トアルヲ相當增額セラレタキコト。

(乙)新タニ規定ヲ設ケ又ハ奬勵ヲ要スル事項。

一、法第四條ニ關聯シテ左ノ一條ヲ設定セラレタキコト。

地方長官ハ結核豫防上必要アリト認ムルトキハ市町村ニ對シ結核消毒所ノ設置ヲ命ズルコトヲ得。

前項規定ニ依リ市町村ニ結核消毒所ノ設置ヲ命ジタル場合ハ北海道地方費、府縣費ヨリ市町村ノ支出スル經費ノ二分ノ一乃至六分ノ一ヲ補助スベシ。

(理由)　現行法中個人ニ對シテ豫防消毒ノ方法ノ義務ヲ命ズルハ可ナルモ個人ニ於テ設備シ得ザル消毒器具藥品等ノ關係アルガ爲メ適當ナル消毒方法ヲ行フ能ハザル實情ニ在ルヲ遺憾トス是レ本案ノ必要ナル所以ナリ。

二、地方長官ニ於テ必要ト認メタル場合ハ市町村ニ對シ結核患者療養ノ施設ヲ命ジ得ルノ條項ヲ設定セラレタキコト。

(理由)　現行ノ療養所ハ一部ノ都市ニ限ラレ而モ療養ノ途ナキモノニ限ラル、ヲ以テ他ノ大部分ノ市町村ニ在テハ患者ノ療養上遺憾ノ點甚ダ多シ故ニ必要ト認ムル市町村ニ對シ傳染病ノ如ク病舍ヲ設ケシメ又ハ現在ノ隔離病舍ヲ利用シ且私立病院等ノ聯絡ヲ取リ患者ノ希望ニ應ジ入院(舍)セシメ幾分ノ料金ヲ徵收シ一方府縣費ヨリ

補助スルトセバ其效果大ナルモノアルヲ信ズ。

三、簡單ナル「患者ホーム」ノ建設ヲ奬勵セラレタキコト。

（理由）諸威國ニテ實施シツヽアルガ如キ設備ノ「患者ホーム」ヲ云フ。

四、結核療養所ノ敷地選定ニ關シ便宜ヲ得ル樣適當ノ規定ヲ設定セラレタキコト。

（理由）結核療養所ノ新設ノ場合敷地選定ニ關シ苦情頻出ノ傾向アリ是レ國民ノ衞生思想ノ發達セザル爲メニ因由スルモノナルガ故ニ法規ヲ以テ之ヲ保護啓蒙スルノ必要アリト信ス。

抄録

外國文獻

結核專門雜誌

Beiträge zur Klinik der Tuberkulose.

36. Band.6. Heft（承前）

○結核ノ臨牀ト無機物代謝　一

H. Heinlit.

結核患者ハ普通ノ食餌療法ニテ無機成分缺乏ヲ來ス傾向アリヤ、此問題ニ就キテ次ノ二項ニ別チテ研究セリ。

（一）Sauerbuch 等ノ推奬セル食餌ハ幾何ノ程度ニ身體ノ無機成分ヲ變化セシムルカ。

（二）無機物代謝ト結核ノ經過トノ間ニ關係アリヤ。

卽チ此目的ノ爲メニ種々ナル病期或ヒハ病型ノ肺結核患者ニ蛋白質、脂肪、含水炭素、燐及ビ「アルカリ」土類ノ含有量ヲ異ニシ然モ全熱量ガ略〻等シキ（三三〇〇乃至三六〇〇「カロリー」）二種類ノ食餌A及ビBヲ與ヘテ燐「カルシウム」「マグネシウム」ノ新陳代謝試驗ヲナセリ、食餌Aハ普通ノ混合食ニシテBハ主トシテ菜乳食（Lacto-vegetablische Kost）ナリ。

食餌A（蛋白質一三〇、脂肪一五〇、含水炭素四〇〇、燐一・八乃至二・四、「カルシウム」一・三乃至一・七、「マグネシウム」〇・四乃至〇・六五）ヲ攝取セル二人ノ患者K、K、及ビH、W（兩肺ニ於ケル增殖性硬化性癆症）ハ一八日ノ新陳代謝期間ニ四・〇及ビ二・五瓩ノ體重ヲ增加セリ、K、Kハ一日平均燐〇・〇二七、「カルシウム」〇・〇一九ヲ身體內ニ獲得シ〇・〇〇二ノ「マグネシウム」ヲ損失シ、H、Wハ燐〇・〇一四、「カルシウム」〇・〇三六「マグネシウム」〇・〇〇五ヲ獲得セリ。食餌B（蛋白質九〇乃至一〇〇、脂肪二〇〇・含水炭素三〇〇、燐三・〇以下「カルシウム」二・五以下「マグネシウム」〇・九以下）ニ於テハK、K、試驗期間第一週ニ於テハ一日平均燐〇・〇九八「カルシウム」〇・三三二、「マグネシウム」〇・〇〇三ヲ第二週ニ於テハ「カルシウム」〇・一五九ヲ獲得セシガ第三週ニ於テハ獲得セル燐「カルシウム」「マグネシウム」ノ大部分ヲ再ビ失ヘリ、體重ハ二一日ノ代謝試驗最終日二四・一瓩增加セリ。

第三ノ患者O、W、（兩肺ニ於ケル增殖性、硬化性癆症）ハB食餌ニヨリテ第一週ニ相當ノ燐「カルシウム」ヲ貯藏シ少量ノ「マグネシウム」ヲ失ヒシガ第二週ニ於テハ一日平均燐〇・〇五一、「カルシウム」〇・〇六〇「マグネシウム」〇・〇〇八、第三週ニ於テハ「カルシウム」〇・〇一一ヲ身體內ニ貯藏セリ。

以上ノ試驗成績ヲ見ルニK、Kニ於テハ身體內ニ獲得セル燐「カルシウム」ハ一時的ノモノニシテO、Wニ於テモ永ク保持スルヤ否ヤハ疑ハシ。

第四患者W、S（左側下葉ニ於ケル增殖性結核）ハ第一週ニ於テ燐〇・四八一、「カルシウム」一・二二二五ヲ獲得セリ、第五患者F、S（兩肺ニ於ケル增殖性硬化性癆症ニシテ空洞ヲ有ス）ハ一八日間ニ於テ體重ハ不變ナリシモ「カルシウム」〇・五一九ヲ失ヘリ。

以上ノ試驗患者ヲ繼續シテ觀察セシニB食餌ヲ與ヘシ後八週或ヒハ一一週後ニ於テK、K、及ビO、Wハ胸部ノ物理的所見及ビ「レントゲン」像ニ變化無

カリキ。

F、Sハ第三週ニ於テ廣汎ナリシ加答兒全ク消失セシモ「レントゲン」像ニハ變化無シ、W、Sモ亦第三週ニ於テ加答兒樣症候全ク消失シ「レントゲン」像ニ於テモ病竈翳ヤ、明透トナレリ、此場合ノ加答兒ハ或ヒハ混合傳染ニヨルモノニシテ結核性ナラザルヤモ知レズ、殊ニカクノ如ク加答兒ノ消失スル事ハ何等特別ノ療法ヲナサヾル場合ニモ屢〻觀察セラル、處ナルヲ以テ此レヲ以テ直チニ食餌療法ノ效ニ歸スル事ヲ得ズ、然レ共「レントゲン」陰翳ノヤヽ明透トナレルハ病竈周圍炎ノ減退ト見做ス事ヲ得。（春木抄）

○肺結核ニ於ケル混合型ノ頻度

Henius, Basch.

臨牀的觀察ヲ總合スルニ慢性細葉性結節性肺結核ノ經過中ニ於テ高熱等ヲ以テ病勢ノ進行ヲ示ス時期ガ屢〻出現スルヲ見ル此際「レントゲン」像ニヨレバ Griff, Küpferle ノ記載セル病理解剖上滲出型ニ匹敵スル病竈ヲ數ケ所ニ見ラレ他ニハ明カニ細葉性結節性或ハ硬化性病竈ガ存在ス。

屢〻肺結核ガ非常ニ急性ニ滲出型ヲ以テ始マル事アリ、殊ニ大喀血ノ後ニ多シ、然レ共此滲出型ヨリ慢性ノ經過ニ移リ次第ニ細葉性結節性或ヒハ硬化性病竈ガ主トナル事アリ、カヽル場合ニ於テ「レントゲン」像ニヨリテハ恢復シ得ル滲出型病竈ト恢復シ得ザル滲出型病竈トヲ別ツ事能ハザル事ヲ臨牀的ニ知レリ。

勿論發病ヨリ治癒或ヒハ死ニ至ル迄慢性細葉性結節性結核或ヒハ滲出性結核ナル場合多數アレ共全經過ヲ通ジテ見レバ混合型ニ比シテ著シク少數ナル事ハ特筆セザル可カラズ。

種々ナル治療ノ適應ヲ定ムル場合ニ孰レノ病型ガ病勢ヲ支配スルカヲ定ムル事甚ダ必要ナルモ混合型ガ非常ニ多キ爲メ結核治療ハ益〻困難ナリ。

○ポメラニヤ人ニ於ケル皮膚結核

W. Leipold.

(一)尋常性狼瘡ハ孰レノ年齢ニ於テモ發生スルモ最モ多キハ壯年期ナリ、十歲迄ニテハ男兒ノ侵サル、事女兒ヨリモ多シ、然シテ特ニ Demmin, Greifswald, Insel Rügen, Belgard, Grimmen, Ückermünde ノ地方ニ多シ。

(二)粘膜ノ共ニ侵サル、事ハ半數以上ニシテ同時ニ明カナル肺症狀ヲ證明セラレタルモノハ二四・七%ナリ、此同時ニ肺症狀ヲ呈スル患者數ノ田舍對都會ノ比ハ狼瘡患者ノ田舍對都會ノ比ヨリ更ニ多シ。

(三)狼瘡ガ男子ニアリテハ特ニ好ンデ四肢ヲ侵ス事及ビ右側上肢ヲ侵ス場合ノ多キ事ハ共ニ認ムルヲ得ズ。

(四)舊「ツベルクリン」及ビ中結核「ツベルクリン」ニ對スル反應ニヨリテ病原菌ノ種類ヲ斷定スル能ハズ。

(五)獨逸ニ於ケル狼瘡材料ノ徹底的研究ノ爲メニ粘膜及ビ肺ヲ各分科專門醫ガ檢査スルト共ニ一定セル狼瘡型圖ノツクラル、事ヲ希望ス（春木抄）

○結核性迷路炎

Fritz Marx

二歲ノ小兒ノ結核性迷路炎ト思惟セラレシ一例ノ病歷ヲ記載ス。（青木抄）

○婦人生殖器結核ト體質

A. Mayer

著者ハ生殖器結核ニ於ケル男女ノ差異、及ビ其診斷、豫後、經過ニ對スル體質ノ意義ニ就キテ研究セリ。

先ヅ臨牀的見地ヨリ生殖器結核ヲ二種類ニ別チ一ハ「アド子クス」ノ腫瘍ガ病狀ノ主トナルモノニシテ癒著セル腹膜ノ結核モ多クノ場合ニ認メラレザルモノナリ、此ヲ「アド子クス」結核ト稱シ喇叭管ガ血行ニヨリテ侵サレタルモノナリ、他ノ病型ハ多クノ場合腹水ガ存在シ稀レニハ廣汎ナル結核性結節アルモノニシテ「アド子クス」ノ侵サル、程度僅少ナリ、此ヲ腹膜生殖器結核ト稱ス。

生殖器結核ニ侵サレタル患者ハ無力、發育不全ノ狀態ニアル事多ク、一般ニ云ハル、結核性體質ノ外第二次性的特徴ノ發現不充分ニシテ女性姿ヲ失ヒ男性ニ類似シテ鬚ヲ生ジ或ヒハ乳輪、胸部、白條、上腿ニ毛ヲ生ズル事少カラズ、生殖器ニ於テモ小兒子宮等ノ如キ發育不全ヲ示ス事多シ、此發育不全ト結核トノ密接ナル關係ニ就キテハ詳細ニ述ブル能ハザルモ恐ク結核ガ發育不全ノ原因ヲナスト共ニ一方ニ於テハ他ノ原因ニ因ル發育不全ノ處ニ於テ結核ガ顯ル、事モ可能ナリ、結核ト生殖器發育不全ノ結合ハ一般ニ知ラレタル處ナルガ我々ノ有スル發育不全患者中其三分ノ一ハ結核ノ家族史ヲ有シ三分ノ一ハ結核ニ罹患セリ、故ニ此兩者ノ同時ニ存在スル事多キハ類症鑑別ノ際ニ利用セラル、モノニシテ原因不明ノ炎症性「アド子クス」腫瘍ハ發育不全ノ徴候アル場合ニハ結核ノ疑ヲ置クヲ得。

此身體的所見ハ又性的機能低下ト一致スルモノニシテ我々ノ患者ノ約三分ノ一ハ初潮著シク遲延セリ、此見解ノ元ニ我々ノ材料ヲ見ルニ「アド子クス」結核ト腹膜生殖器結核ノ間ニハ或差異ヲ見出サレ觀察例ハ少數ナレ共前者ハ後者ニ比シテ初潮ノ普通ニ現ハル、事多シ、又生殖器結核患者ノ既往症中其思春期ニ於テ無月經、月經不利、月經困難等ガアル事稀レナラズ、猶生殖器結核アル場合ニハ不妊ノ來ル事非常ニ屢〻ニシテ我々ノ結婚セル患者中半數以上ハ之レナリ、此點ニ於テモ「アド子クス」結核ト腹膜生殖器結核トノ間ニハ差異アリテ後者ノ不妊率ハ一一・一%ナルニカ、ハラズ「アド子クス」結核ニ在リテハ九二・三%ナリ、故ニ不妊ハ屢〻結核ノ前驅ヲナス事アリト看做ス事ヲ得、我教室ヲ不妊ノ爲メニ訪ヒシ患者中七・二%ハ粘膜搔爬ニヨリテ生殖器結核ヲ證明セリ。

年齢ノ關係モ亦興味アルモノニシテ我々ノ患者ノ四分ノ三ハ三〇以下ナリ、然シテ此場合ニ於テモ「アド子クス」結核ハ其大部分ヲ占ムルモ腹膜生殖器結核ハ三〇以上ノ者ヲ侵ス事少カラズ、故ニ下腹部ノ結核ハ若年者ニ於テハ多ク「アド子クス」ヲ侵シ高齢者ニアリテハ腹膜ヲ多ク侵スガ如シ。

手術ニ際シテモ此二型ハ差異ヲ示シ腹水性結核アルモノハ手術後右腹膜炎ヲオコシ或ヒハ切創ノ開綻スル事多シ、最後ニ喇叭管ニ於ケル結核、淋疾、癌ノ關係ヲ見ルニ喇叭管ノ炎症殊ニ淋疾ハ結核菌附著ヲ容易ナラシムト云フモノアルモ著者ハ Pankow ノ統計ニヨリテ此レヲ認メズ。

喇叭管ニ於テ癌及ビ結核ガ同時ニ存スルコトハ稀有ナリ、著者ハ此兩者ノ關係ニ就キテ數多ノ學者ノ種々ナル統計及ビ觀察ヲ擧ゲタル後著者トシテハ此レニ就キテ未ダ意見ヲ述ブルニ至ラズト云フ。

（春木抄）

○海獏及人類ニ於テ實驗ヲ基トセル「ツベルクリン」局所過敏惹起ニ就テ

(1)自身調製セル結核菌注射材料ヲ以テノ試驗

Dr. Hans Fernbach.

生菌ノ注射ヲ行ハズニ「ツベルクリン」ニ對スル反應ヲ高ムルハ、結核感染ニ對スル免疫ヲ高メント勉ムルモノナリトシ動物實驗及人體試驗ヲ述ベタリ。

著者ノ調製セル結核菌注射材料ヲ以テノ動物實驗ニヨレバ結核菌ハ確實ニ殺菌セラレタル場合ニ於テモ、少量ノ菌ヲ以テ前處置ヲ行ヒタル動物ノ大部分ハ「ツベルクリン」局所過敏トナルト云フヲ得、時期ヲ異ニシテ行ヒタル四回ノ試驗列ニ於テ、六十三頭中、三十六頭ハ、確實ニ多少ノ過敏症ヲ呈セリ、病獸ハ不適當ニシテ、少ナクトモ體重四〇〇瓦以上ノ動物ハ體重ノ輕キ、充分發育セザル動物ニ比シ、良好ナル成績ヲ與フルコトハ肯定セラル、「ツベルクリン」過敏ノ殆ンド二年ニ亙ル存續ヲ見タリ。總テノ動物ハ剖見スルニ腹腔内注射ニヨリ臓器内ニ肉眼的竝ニ、顯微鏡的ニ結核性病變ヲ認メズ、然レドモ之ニ反シ、結核組織ヨリナル一ツノ大網腫瘍ヲ證明セリ、二頭ニ於テハコノ大網腫瘍中殆ンド二年後ニ於テ、結核菌ヲ證明セリ。

結核ナキ小兒ノ淋巴腺内ニ殺菌セル人型結核菌一瓩ヲ注入スルコトニヨリテ、實驗例ノ一部ニ於テハ、一年以上存續スル、眞性「ツベルクリン」過敏症ヲ惹起シ得、更ニ惹起セラレタル「ツベルクリン」皮膚反應ハ、筋肉内「ツベルクリン」輸入ニヨリ著明ニ發炎セラル、事實ヲ見タリ。コレニヨリテ皮膚反應ノ内ニ結核組織ノ形成セラルヽヲ認メラル。殺菌結核菌一瓩ヲ筋肉内ニ注射セラレタル二例ノ小兒ニ於テハ、三ケ月半ノ觀察期間ニ於テハ結核性皮膚過敏症ヲ惹起シ得ザリキ。

（石川抄）

○結核ト妊娠トノ合併ニ關スル補遺

Dr. H. Jünzer.

本問題ニ關スル多數ノ文獻ヲ述べ、更ニ三十六例ニ於ケル經驗ニ基キ、次ノ見解ヲ有ス、卽チ肺ノ潛伏性結核ノ大多數ハ妊娠ニヨリテ影響ヲ見ザルガ故ニ、妊娠中絶ノ適應症ニ非ズ。之ニ反シ、進行セル結核ノ場合ニハ、人工産ニヨリテ、妊娠ハ中絶ス可キデアル、但シ患者ガツルバンニヨル、二期或ハ三期ニシテ、妊娠最後ノ三月ニアルモノハ、小兒ニ對スル希望上人工早産ハ見合ス可キデアル。

多産婦ニノミ行ハル可キ、避妊ノ方法トシテハ、Vaginalehohe Corpusamptation ヲ推薦シ、尙妊娠中絶ニ引キヅヽイテ適當ナル理學的及榮養的規準アル療法ヲ行フヲ要スト。

（石川抄）

○「アレルギー」ノ氣管枝喘息ニ對スル關係

Dr. I W. Samson

著者、二年間、四十例ニ就テ行ヒタル實驗ニヨレバ、アメリカ又ハイギリスノ學者ノ云フ如ク、氣管枝喘息ノ總テノ例或ハ大部ノ例ハ「アレルギー」反應ニヨルモノナリトナス結論ニ到達スル能ハズ、一ツノ物質ノ輸入ニヨリ、發作ヲ起ス患者デサヘ尙他ノ發作ヲ起ス可キ要素ニ支配サルノデアル。著者ハ「アレルゲン」ノ作用ヲ起スニハ、屢〻他ノ例ヘバ、能働體トモ云フ可キ、尙他ノ要素ヲ要スル如ク思惟ス。實際的ニ、喘息發作ヲ誘起スル物質ノ輸入ニヨリ甚ダ危險ナル狀態ヲ惹起スルコトアル故ニ、甚大ナル注意ヲ要ストシテ、ソレ等ノ症例ヲ述べ、實驗上ノ注意ヲ擧ゲ、四十例ノ氣管枝喘息、十二例ノ蕁麻疹、他ノ過敏性疾患十例、及三十例ノ非過敏症對照例ニ實驗ヲ行ヘリ。

二例ニ於テハ皮膚局所過敏反應ノ被働的移行ニ成功セリ。一定ノ物質ニ對スル過敏症ノ遺傳モ證明スル能ハズ。

多クノ事實ハ、先天的又ハ後天的ニ來ル、充分ナル特異的「アレルギー」ニ非ズシテ、單ニ過敏症完成ヘノ一般的傾向ヲ示ス如ク考ヘラル、又强度ノ「アレルギー」ヲ示スモノト、健康體トノ間ニハ種々ナル移行型アリテ、一定ノ生理的調節機能障碍ヲ來シタル狀態ニ於テハ健常人モ亦「アレルギー」ノ症狀

ヲ發現シ得ル如シトシ、コレガ發現ニ關スル想像說ヲ擧ゲ、尙學說的考案ヲ述べ、喘息治療的基礎ノ進步ヲ紹介セリ。（石川抄）

○肺結核患者ノ妊娠中絶ニ就テ

Prof. Dr. Walther Schmitt.

ヴュルツブルグ婦人科教室ニ於テ、一九〇〇ヨリ一九二〇ニ至ル間ニ、肺結核ノ爲メニ、妊娠中絶ヲ行ヒタルモノ三十一例ナリ、卽一年約一・五五ノ割合ニシテ、當時年々、七百乃至千ノ出產數ヲ有シタリ、是等ニ就イテ見ルニ妊娠一ケ月ニシテ、ツルバン二期ヲ出デザル場合ノ著明ナル肺結核ノ場合、人工中絶ハ必ズ良好ナル成績ヲ示ス、妊娠進行セルモノハ、著者ノ症例僅少ナレドモ、コノ場合ニモ、亦良果ヲ望ミ得ベシ、喉頭結核ヲ合併セルモノハ、效果ヲ來ス能ハズ。

人工中絶ノ根治的手術ハ腟道ヨリスル子宮內容排除ニ比シ、特ニ好成績ヲ與ヘズ、妊娠ノ甚ダ進行セルモノニツイテハ經驗ヲ有セズ。

スベテノ著明ナル肺結核ニ、妊娠中絶ヲスヽムルコトハ、實地上ニハ考慮ス可キモノヽ如シ。（石川抄）

○「プロクチン」問題ニ就テ

Prof. Dr. P. Wichmann.

フェルナー氏ノ報ゼル、ピルケー丘疹ノ「ツベルクリン」能働性物質「プロクチン」ノ存否ニツキ、著者ハ四十四例ノ「ループス」及皮膚結核ヲ有スル患者ニ就キ、丘疹內容物質ノミ或ハ之レニ「ツベルクリン」ヲ加ヘテ檢スルニ、「プロクチン」ハ必ズシモ規則正シク出現スルモノニ非ザル如ク、又本物質ノ特異ニ關シテモ、完全ニ立證サレタリト云フ能ハザル如シ、又結核感染ニ關スル本物質ノ意義モ尙問題ナリト。（石川抄）

○「ツベルクリン」反應ノ特異性ニ就テ

K. Zieler und J. Häuel.

セルテル及ビ其ノ學派ノ「ツベルクリン」反應ノ特異性ニ關スル研究ノ複試ヲナシ、結核菌及大腸菌注射材料ヲ以テ比較的ニ皮膚注射試驗ヲ行ヒ、セルテル、タンクレト反對ニ「ツベルクリン」反應ノ特異性ヲ認メタリ、其ノ理由トシテ、(一)結核菌物質ノ極微量ヲ以テシテハ、只結核感染アルモノヽニ陽性反應ヲ起スニ反シ、全ク結核感染ナキモノニハ起サザルコト、及他ノ細菌物質ヲ以テシタル場合ニハ、結核感染アルモノニモ、否ラザルモノニモ、同樣ナル陽性成績ヲ得ルコト、(二)「ツベルクリン」又ハ大腸菌劑ニヨリ發炎ハ、全身反應、及發炎其ノモノヽ性質ヨリ、本質的ニ異リ、後者ニヨルモノハ、在來知ラレタル假性反應ニ相當シ、非特異的ノモノト認ム可キコト、(三)著者等ノ觀察ニヨレバ、大腸菌毒素ハ血管毒トシテ作用シ、毛細管ノ持續的麻痹ヲ來シ其他ノ非特異的刺戟物質ニ比シ、强度ナル障碍ヲ來シ、爲メニ恰モ結核病竈ニ對スル金鹽ノ如ク、時トシテ假性反應ヲ來ス可キコトヲ擧ゲタリ。（石川抄）

（以下次號）

○肺臟結組織增殖ニ對スル炭粉末吸入ノ效果ニ就テ

Zeitschrift für Tuberkulose.
Bd. 46, H.2, 1926

Dr. Kurt Henius u. Dr. Otto Richert.

一、結核感染家兎肺臟ニ對スル炭粉末吸入ノ效果ニ就テ。

著者ハ家兎五頭ニ就テ混合菌ノ皮下注射ヲナシ之ヲ炭粉末ヲ吸入セシメタルニ吸入ト同時ニナセシ結核菌感染ニ際シテ三ケ月以內ニ於テハ病臟器ノ結組

織生成ニハ何等ノ影響ナキノミナラズ此影響アラシムル爲ニハ感染前長期ノ吸入ガ少クトモ必要ナラン。

然シテ此試驗ハ未ダ結論ニハ達セザルモスデニ七ケ月ヲ經過セリ。

又前記ノ如ク吸入ニヨル結組織ノ生成ガ非常ニ長期ヲ要スルヲ以テ粉末吸入ニヨリテ起サル可キ氣道ノ損傷必ラズヤ結核ノ病勢增進ヲ早メルト云フコトハ考慮ニ値スベキコトナリ、此考ハ又炭末ノミナラズ石灰、硅酸ノ吸入ニ於テモ同樣ニ及ボシ得ベシ。（太田抄）

○自家混合「ワクチン」ヲ以テセル肺結核ノ治療ニ就テ

Dr. A. V. von Ilberg. u. Dr. Franz Cantani (Neapel)

喀痰ヨリ得タル自家混合「ワクチン」ヲ以テセル肺結核ノ治療ハ從來ノ治療法ニ比シ何等ノ根本的改良ヲナセルモノト思ハレズ。

十八例中ニ於テ然モ長期ノ治療ニ於テ僅ニ四例ノミニ確ニ「ワクチン」注射ノ效果ナラントセラル、一般狀態及肺病竈ノ確カナル良好結果ヲ得タルノミナリ、然シ喀痰ノ根本的ノ量的及質的治癒ハ臨牀的ニモ細菌的ニモ見ラレズ。（太田抄）

○肺結核ノ食餌的治療ニ就テ

Conrad Mortin.

肺結核ノ食餌的治療ノ問題ハ從來血液鹽基性ノ增加ニ努力スルコトガ必要ナリトセラレタリ、卽アル種ノ藥劑ヲノゾケバ一定食餌ニヨリ卽果實、根野菜、葉野菜及綠色「サラダ」等ニヨリテノ榮養ガ必要ナリ。

然シテ金屬物質ノ多量ノ攝取ニヨリテ非金屬性ガ生ゼラレテ子バナラズ殊ニ「ナトリウム」、「カルシウム」等ガ必要ナリ、酸鹽基ノ調和ガ良ク保タレザル可ラズ。

然シテ此事ハ糖尿病及身體運動ニヨリテオコサルヽ肺結核ノ惡影響ニ於テ示サル然シテ內分泌ヲ有セル腺ノ作用ニヨル結核ノ或ル攝合作用ヲモ考慮セザル可ラズ。（太田抄）

Beiträge zur Klinik der Tuberkulose.
64 Bd., 3/4 Heft 1926

○結核ノ各病期ニ於ケル肋膜炎 腦膜炎及ビ腹膜炎

G. Liebermeister

肋膜炎、腦膜炎及ビ腹膜炎等ノ結核合併症ハ常ニ結核ノ經過ニ急性轉化ヲナスモノニシテ、ランケノ分類ニ從ヘバ是等ハ主トシテ第二次期ニ現ハルヽモノナルベキモ、著者ノ分類ニヨレバコレト異ル。卽チ初期ハ急性疾患ニシテ停止ニ至ルカ、又ハ直接惡性結核ニ移行スルモノ。第二次期ハ初期ヨリ惡性結核ニ移行セザリシ場合ニ生ジ臨牀上非活動性ナルカ或ハ週期的經過ヲトル。第三次期ハ破壞的臟器結核ヲ生ジタル時ニ初マリ、ランケト異リテ肺結核ノミナラズ腎結核、骨結核、孤立性副腎乾酪變性モ第三次期ノ表現トナス。

著者ハ急性轉化ヲ以テ第二次期ニノミ起ルモノニ非ズ、週期的階段的經過ハ第三次期ニ於テモ亦特有ナルモノトシテ、此見地ヨリ豫後竝ニ治療上ニ利スルトコロアラントス。（田原抄）

○結核ノ各病期ニ於ケル肋膜炎

Rudorf Steinert

結核性肋膜炎ノ際ニハ唯漿液膜炎症ノミナラズ根本ヲナセル臟器結核ヲ治療スルコトガ重要ナルガ、之ハ結核ノ三病期ニ就イテ全ク相異スルモノナリ。

從來結核性肋膜炎ノ分類ハ炎症ノ形式ニヨリテ分チ根本疾患トノ關係ハ顧慮ヲ用キザリシガ、著者ハ四十數例ニ就イテ病期ヲ分ツテ觀察セリ。

(一)初期結核ノ診斷ヲ下シ得ルコトハ稀ナルガ、實際上小兒ノ肺及肋膜ノ炎症ハ恐ラク大多數ハ初期ナルベシ、之ヲ早期ニ知ルコトハ再發ヲ能フ限リ避ケンガ爲ニ必要ナリ。

(二)第二次期ニハ種々ナル漿液膜炎症殊ニ所謂「ロイマチス」性肋膜炎ヲ生ズ、比較的良性ナルモ再發ノ傾向アリテ、後ニ局所的ニ疾患ヲ生ズルコト稀ナラザルヲ以テ再發ヲ防グコトハ最必要ナリ。

(三)第三次期ノ肋膜炎ハ屢〻局所的肺結核ノ隨伴症狀ニシテ通例コレハ癒著、肥厚ヲ作ル、稀ニ化膿性肋膜炎ヲ生ズ。

豫後ハ肺結核ノ經過ニ從フ、而シテ肋膜炎ノ發生ハ急性轉化ナレドモ、滲出液ニヨリテ人工氣胸ノ如ク作用シ良好ナル影響ヲ蒙ルコト少カラズ。但シ癒著ニ依リテ肺ノ病變ノ治癒ヲ妨グルコトハ考ヘザルベカラズ。

現今ノ知識ハナホ不充分ナガラ、精密ニ下シタル診斷ハ重要ナル豫後竝ニ治療上ノ結論ヲ與フルモノナリ。

（田原抄）

○結核ノ各病期ニ於ケル腦膜炎

H. Sieper

前項ト同樣ノ見地ヨリ二歲乃至四十三歲ノ結核性腦膜炎三十二例ニ就イテ分類的ニ觀察セリ。

初期ニ於テ結核ガ腦膜ニ轉移スルコトハ比較的稀ニシテ、大多數ハ第二次期ノ急性轉化ナリ、又主トシテ肺ニ於ケル第三次臟器結核ニ次イデ生ズルモノ多シ。

腦膜炎ガ何レノ病期ニ屬スルカヲ定ムルコトハ、從來全ク無效トセラレタル治療ヲ治癒シ得ベキ場合ニ試ムルニ意義ヲ有ス。

（田原抄）

○結核ノ各病期ニ於ケル腹膜炎

H. May

三十五例ニ就イテ前項ト同樣ノ見地ヨリ觀察セリ。

初期ニ於テハ腹膜炎ノ診斷ヲ得ルコト甚ダ稀ニシテ剖檢上確實ナリシモノ一例アリキ。肺ニ初期變化群アル際ノ初期肋膜炎ノ如ク恐ラク腸ノ初期變化群アル際ニ生ズルモノナルベシ。此際腹膜炎ノ發生ハ特ニ大量、感染ヲ意味スルモノナルヲ以テ豫後ハ不良ナリ。

第二次期ニハ腸初期變化群ノ急性轉化トシテ生ジ或ハ全身的急性轉化ノ部分的症狀トシテ來ル、又最多キハ第二次期ノ唯一症狀ヲナセルモノナリ。豫後ハ發生ノ方法ニ從テ異リ、過敏狀態ノ結果トシテ生ゼルモノハ可良ナレドモ再發ノ傾向アリ。全身的急性轉化ノ場合ニハ死ニ歸スルヲ通例トス、又屢〻第三次期ヘ移行スルモノアリ。

第三次期ニハ早期ニ血行ニヨリ又ハ淋巴道ニヨリテ生ズルモノアリ、コレハ治癒スルコト稀ナラズ、第三次晩期ニ於テハ腸ノ潰瘍トナレル部分ノ隨伴症狀トシテ來リ、滲出液ヲ作ルコト無ク腸ノ癒著ヲ生ズ。又此時大腸菌ノ混合傳染又ハ結核菌ノミニヨリテ化膿性腹膜炎ヲ生ズルコトアリ、豫後ハ早期ノモノハ存在スル臟器結核ノ經過ニ從フモ晩期ノモノハ終末ノ近ケルヲ考ヘザルベカラズ。

單ニ結核性腹膜炎ナル診斷ヲ以テ滿足スルコト無ク、ソレガ何レノ病期ノ部分的症狀ナルカヲ明カニスルハ、豫後竝ニ治療上ニ於テ從來ヨリ以上ノモノヲ得ンガ爲ニ必要ナリ。

（田原抄）

○肺癆ニハ果シテリーベルマイステルノ第二次期症狀ガ先ヅ以テ生ズルモノナルカ

H. Sieper

リーベルマイステルノ第二次期ニ屬スル結核毒素的症狀卽チ「フリクテン」、肋膜炎、無力性貧血性症候群等ヲ二十七例ノ患者ニテ檢シ五分ノ一ニ於テ證明セリ。

結局ハ肺癆トナルベキ結核ノ經過中ニ於テ第二次期症狀ハ從來考ヘラレタル如ク稀ナルモノニ非ズ。サレド又所謂惡性結核ヲ除クモ肺癆ニシテ第二次期ノ症狀ヲ經過セザルモノアリ。從テ第二次期ニ於テ臨牀上潛在性ノ經過ヲ取ルコトモ屢〻ナルガ如シ。

（田原抄）

○第三次早期ノ肺癆ニ於ケル空洞

Al. Rosarius

既往症ニヨリテ結核性肺症狀ノ早期ニアリト考フベク、臨牀的所見亦僅少ナル場合ニ「レントゲン」線ニヨリ一又ハ數個ノ空洞ヲ見ルコトアリ。コレヲ早期空洞トシテ第三次晩期ノ終末空洞ト區別ス。

終末空洞ハ瘢入セル空洞ニシテ中ニ索狀物ヲ横タヘ、多量ノ乾酪樣物質ヲ入レ、隣接空洞ト融合シテ大小ノ破壞空洞塊ヲナス。之ニ反シ早期空洞ハ大サハ主ニ胡桃大、形ハ規則的ニ圓形、「レントゲン」像ニヨリ鮮鋭ナル環狀ヲナシテ殆ド健康ナル肺組織ニ移行セリ。

早期空洞ノ診斷ニハ「レントゲン」線ヲ以テ第一トシ、臨牀的症狀ハ第二ナリ。

豫後ハ大サ小ニシテ、健康肺組織ニ圍マレ、肋膜癒著少キヲ以テ萎縮、瘢痕化ノ傾向大ニシテ從來空洞ニ對シテ考ヘラレタルモノト異ル。

療法ハ積極的療法ヲ行フベク、人工氣胸ニヨリテ纖維性瘢痕タラシメ得ベシ、「ツベルクリン」モ亦瘢痕化ノ一助トシテ用フベシ。

（田原抄）

○肺臟虛脫療法ニ於テ胸廓成形術ヲ採リテ人工氣胸術ヲ放棄スベキカ

Alfred Schoop

人工氣胸ニ對シ一部ノ肺臟外科醫ハ膿胸ヲ生ズルノ故ヲ以テ不可トシ、胸廓成形術ヲ以テ適當ナル方法トナセドモ著者ハソノ人工氣胸ノ經驗ニ基イテ之ニ反對シ、人工氣胸ノ危險トセラル、點ハ甚ダ少ク、優秀ナル技術ヲ以テセバ實際上ニハ殆ド意義ヲ認メズ、加フルニ人工氣胸ニヨリテ求ムベキ效果ハ甚ダ大ニシテ現今肺臟虛脫療法ニ於テ到底人工氣胸ヲ放棄スル能ハズトナセリ。殊ニ著者ハソノ適應症ヲ擴張シテ兩側肺結核、小兒ノ初期小葉性浸潤等ニモ應用シテ好結果ヲ收メタルガ是等ニ對シテハ胸廓成形術ハ全ク用フル能ハズ。胸廓成形術ハ若シ他側ノ惡化セル場合ニハ人工氣胸ノ如ク中止スルコト不可能ナルヲ以テ甚ダ危險ニシテ、且一度施行スレバ結核ガ治癒セル後モ呼吸ハ恢復スル能ハズ、又肉體的勞働能力ヲ甚ダシク減殺スル爲ニ下層社會ニ向テハ不適當ナリ。唯、人工氣胸ノ成功セズ他側ノ比較的輕度ナル場合ヲ適應症トスレバ胸廓成形術ハ肺臟虛脫療法ノ有效ナル一法ト謂フベシ。

（田原抄）

○二三ノ興味アル呼吸器所見

G. Liebermeister

次ノ症例ニツキ「レントゲン」寫眞ヲ掲ゲテ說明セリ。

（一）横隔膜弛緩。　（二）横隔膜大「ヘルニア」

（三）人工氣胸ニテ作リタル部分的氣胸ノ全ク孤在性球狀空洞ト誤ル如キ「レントゲン」所見。

(四)強度ノ癒著ノ故ヲ以テ横隔膜神經切除術ヲ行ヒタルモ、著效ナキタメ、試ニ人工氣胸ヲ行ヒタルニ期待ニ反シテ困難ナク完全氣胸ヲ形成セリ。卽チ人工氣胸ノ成不成ハ試ミズシテ定ムル能ハズトナス。

(五)人工氣胸ノ經過中他側ニ滲出性肋膜炎ヲ生ジ、兩側氣胸ヲ作リテ好結果ヲ得タリ。

(六)兩側副睾丸結核ノ患者、「レントゲン」ニヨリ兩肺ニ汎發性粟粒結核ヲ認メタルモ、臨牀上所見無キノミカ活動ニ堪エ、二年後ニハ「レントゲン」像ニ於テ治癒セルヲ見タリ。之ニヨリ、粟粒結核モ治療ノ可能性アリト云フベク、又臨牀上潛在性ノ經過ヲ取ルコトモアリト云フベシ。

(七)骨盤外傷ノ患者、「レントゲン」ニテ右肺ニ栓塞性膿瘍ヲ見ルモ、他覺的症狀ヲ缺キ、二年後ノ像ハ細キ瘢痕ヲ止ルノミナリキ。　(田原抄)

○結核ニ對スル肺尖素因ノ本質ニ就イテ

H. Loeschcke

結核ニ對スル肺尖素因ニ就キ從來認メラル、トコロハ(一)成人ノ肺尖ハ一般素因ヲ有シ、粟粒結核ノ如キ血行性播種ニ對シテモ亦然リ。

(二)一定ノ年齡ニ於テ素因ノ增强ヲ見ル、十六乃至二十三歲ニ最多ク、女性ハ男性ニ比シテ早期ニ初リテ早ク終ル。

(三)一定ノ「ハビツス」ニ於テ素因ノ增强アリ。

尙、小兒、老人ノ多數、及ビ强度ノ胸廓畸形卽チ脊柱側彎症、龜脊、佝僂等ニハ肺尖素因ヲ缺ク。

著者ハ肺尖素因ヲ以テ機械的原因ニヨルモノト考ヘ、ソノ本質ヲ究メントス。

一般ニ肺尖ニ於ケル瓦斯交換及ビ血行ノ低下ハ肺尖素因ノ本質的ノモノト考ヘラル、所ナルガ、横隔膜ノ位置ヲ檢スルニ無力性體質、腸下垂症患者ニ於テハ横隔膜低位アリテ從テ肺臟長ク、滴狀心ヲ生ジ、肺尖部位ハ持續的ニ伸長ヲ蒙リテ血行不充分トナル。

思春期ニハ横幅發育ガ、縱長發育ニ伴ハズシテ此狀態ヲ生ズ。又一般ニモ、疾病ニヨリ瘦削ヲ來ス時ハ一時的ニ此横隔膜低位從テ肺尖素因ヲ得ベシ。

小兒、老人、脊柱側彎症、龜脊等ニ肺尖素因ノ無キハ是等ノ胸廓形狀ガ本來ノ肺尖ヲ形成シ居ラザルニヨル。

尙、横臥療法ハ腹壁、横隔膜、從テ肺尖ノ緊張ヲ去リ、再ビ平常ノ血液循環ヲ得ルニ效アリ。又、肺臟虛脫療法モコノ緊張ヲ去ルコトヲ以テ原理トナス。　(田原抄)

○肺以外ノ結核ト肺ノ再感染

Fritz Hesse

二乃至二十歲ノ骨、關節結核患者二十名ニ就キ、臨牀的竝ニ「レントゲン」ニヨリテ肺所見ヲ檢シ、臨牀上陽性八例、「レントゲン」陽性十三例及ビソノ疑ハシキモノ三例ヲ得タリ。

從來活動性骨結核ノ時ニ肺ニ結核竈ナシトセラレタルモ、コレハ「レントゲン」ヲ怠リタル爲ナルガ如ク、コノ際肺症狀ハ既ニ活動性ナラザルモノ多キヲ以テ、骨結核ニ對スル肺ノ「レントゲン」診斷ハ必要事ナリ。同時ニ存在スル骨及ビ肺ノ病竈ガ何故ニ一ハ進行性他ハ潛在性ナルカニ就イテハ定說ナシ。　(田原抄)

○人工氣胸ヲ試ミテ無效ナリシ後ノ自發性氣胸ニ就イテ

A. Walser

人工氣胸ヲ施行セルモ解放性肋膜腔ヲ見出シ得ザルガ爲ニ瓦斯ヲ送入スル能

ハザリシ七例ニ於テ二三時間後ニ全ク症狀無キカ又ハ多少ノ疼痛及ビ呼吸促迫ヲ伴ヒテ自發性氣胸ヲ生ジ、更ニ後送塡ヲ行フヲ得テ滿足スベキ治療的效果ヲ擧ゲタリ。

コノ成因ハ刺針ニヨル肺ノ損傷ナルベク、ソノ小ナルガ爲ニ徐々ニ氣胸ヲ生ジ緩疎ナル癒著ノ中ニ於テ先ヅ肥厚部位ノ氣腫ヲ生ジ更ニ癒著ヲ全ク剝離スルニ至ルモノナルベシ。此際生ジタル部分的肺虛脫ノ爲ニ損傷ハ塞リテ更ニ空氣ヲ流出スル能ハザラシム。生ジタル氣胞ハ「レントダン」ニヨリ三百乃至五百瓩ト見ラレタリ。

肺損傷ニヨル肋膜感染ノ危險ハ空洞ヲ突キタル場合ヲ除イテハ、甚ダ少シ。

（田原抄）

○自發性及ビ人工氣胸ニ於ケル縱隔囊。

肋膜及ビ縱隔囊ニ合併症ヲ有スル自發性氣胸ノ一例

N. Oekonomopoulo

自發性漿液氣胸ニシテ縱隔膜竇「ヘルニア」ヲ伴ヘル一例ヲ報告シ、縱隔竇ノ狀態ハ隣接臟器ノ新鮮ナル又ハ慢性ノ疾患ニヨリテ異リ、氣胸ヲ生ジタル際ニ於ケルソレ等ノ狀態及ビ胸廓ノ關係等ニヨリ縱隔竇「ヘルニア」ヲ生ズルモノナルベク、氣胸ノ際ニ比較的稀ナルハ是等ノ條件ガ相代償スルニヨルト考フ。

（田原抄）

○終末前氣管枝系統ノ氣管枝擴張。

ブラウエル氏小空洞說ノ一補遺

H. Loeschcke

氣管枝擴張症ニテ「レントゲン」ニヨリブラウエル氏小空洞ノ像ヲ呈シタル患者ノ剖見及ビウッド氏金屬ヲ以テ左肺ニ作リタル氣管枝模型ニ依リテ、全部ノ終末前氣管枝ニ囊形成アリテ、終末毛細氣管枝ヨリ周邊ノ部分タル呼吸性毛細氣管枝、氣胞道等ニハ何等ノ變化ヲ認メザル系統疾患ナルヲ見タリ。卽チ「レントゲン」ニテブラウエル氏小空洞ト見タルハ終末氣管枝ニ於ケル氣管枝擴張ナリシナリ。小空洞ヲ見タル場合ニハ全肺ニ涉ル系統疾患ヲ念頭ニ置カザルベカラズ。

（田原抄）

○海猥及ビ人ノ試驗ヲ根據トシ「ツベルクリン」局所過敏性ノ形成ニ就イテ。

ランゲル氏「ワクチン」第一四七號ノ第二追試

Hans Fernbach

(一)海猥ヲ用キ、ランゲル氏「ワクチン」第百七號〇・一乃至〇・一五瓩ヲ腹腔內注射シ、舊「ツベルクリン」ニヨリテ過敏性ヲ檢セルニ二十九例中二十例ニ於テ結核性皮膚「アレルギー」ヲ證明セリ、卽チ動物試驗ニ於テ良好ナル成績ヲ得タリ。

(二)六名ニ小兒ニ就キ、「ツベルクリン」皮內反應ノ陰性ヲ確メタル後、ランゲル氏「ワクチン」ノ試驗ヲ行フ。三例ハ觀察ノ短時日ナリシ爲、之ヲ除外シ、他ノ三例中一例ノミ中等度陽性ノ成績ヲ得タリ。

以上ハ「アムプレ」ニ依テ「ワクチン」ノ不良ナリシ懸念アリシ爲ニ更ニ六名ノ「ツベルクリン」陰性ノ小兒ニ就イテランゲル氏「ワクチン」〇・一瓩ヲ三回注射シ、「ツベルクリン」局所過敏性及ビ部局淋巴腺ヲ檢査セリ。五例ニ於テ皮內反應ニヨル「ツベルクリン」陽性ヲ得タリ。ソノ內二例ハ五十五日後、二例

ハ三ケ月半後、一例ハ七ケ月後ニ現ハレタリ。

他ノ一例ハ三ケ月後ナホ陰性、但シ更ニ後ニ至リ陽性トナルヤ計リ難キモ觀察スルラ得ザリキ。淋巴腺腫脹ハ皮膚「アレルギー」ノ强サト一定ノ平行ヲ見タリ。

最後ニ結核過敏性ニ關シテ論評シ、以上ノ結果ヲ以テ、結核ノ局所過敏性ノ發生ニハ結核病竈ノ存在ヲ必要トストノ見解ヲ否定スベキ誘因トハナラズト結論セリ。（以下次號）

（田原抄）

○肺結核ニ對スル「サノクリジン」療法

Dr. C. Meili, Schweiz. M. W. Nr. 43. 1926

丁抹生理學者ミルゴー(Mölgard)教授ニヨリテ唱道セラレタル「サノクリジン」療法ニ關シテ世界各國ヨリ兎角ノ批評アル所ナルガ最近ダボスノマイリー氏ノ瑞西醫事週報ニ發表シタ成績ヲ抄錄スルト。

使用患者ハ六例デ其ノ中四例ハ重症第三期肺結核患者デ既ニ空洞形成ヲ見尙ホ一部分喉頭結核ヲモ兼子タルモノ、二例ハ中等度肺結核デ一側上葉ハ著明ナル初期滲出性浸潤ヲ示シ尙ホ其ノ中ノ一例ハ結核性脊椎炎ヲ兼子テオル殘リノ二例ハ輕症閉鎖肺結核患者デ其ノ中ノ一例ハ更ニ結核性浸出性心囊炎ヲ有スルモノ。

「サノクリジン」使用術式ハ型ノ如ク行ツテアル卽チ患者ハ全治療期間ハ就牀セシメ體溫ハ二時間毎ニ直腸內檢溫ヲ行ヒ、毎日一回、要スレバ三回檢尿ス、體重ハ一週一回計量ス、又本治療ノ始ト終リニハ必ズレントゲン檢査ヲ行ツテアル。

「サノクリジン」使用ハ凡テ靜脈內注射トシ用量ハ初回〇・〇二五乃至〇・一瓦ヨリ始メ漸次增量シテ一・〇瓦ニ到ラシム、注射回數ハ五回乃至九回而シテ「サノクリジン」使用總量ハ、一・六乃至三・五瓦ニ及ブ、凡テ前注射ニヨリ續發現象ノ消失ヲ俟ツテ次回ノ注射ヲ行ツタトシテアル。

各患者ノ病歷經過等ハ原著ニ讓ルコト、シテ玆ニハ氏ノ結論ノミヲ抄錄シテ見ルト。

第一、「サノクリジン」注射ニヨリテハ毫モ進行性肺結核病變ノ進行ヲ阻止スル力ガナカツタ。

第二、廣汎ナラザル滲出性肺結核ニ對シテモ其ノ空洞形成ヲ防止シ得ナカツタ。

第三、輕症閉鎖性肺結核ニ對シテスラ何等好影響ヲ與フルコトガ出來ズ唯微熱アリシ患者ガ常溫ニ低下シタ樣ニ思ハレタ位ノ事ニ過ギナカツタ。

他方ニ於テ患者ノ一般狀態ヲ惡クシタ點ヲ擧グルナラバ、重症患者ニ於テ特ニ著シキ腸管內反應ヲ惹起シ宛カモ潛伏性腸結核ヲ進行性決定的ノ腸結核ノ形ニ誘導シタルガ如キ觀アルコト及ビ喉頭結核モ亦本療法ニヨリ增惡シタルコトハ否ムコトガ出來ヌ。

更ニ一時的障碍ニモセヨ「サノクリジン」注射ニヨリテ左ノ如キ副作用ノ現ハレタルコトモ警告セ子バナラヌ。

第一、腎臟ノ障碍、殆ンド凡テノ患者ニ於テ蛋白尿ト圓壔尿ガ現ハレテオル。

第二、胃腸障碍、各注射ノ增量毎ニ食慾不振、嘔吐下痢等ガ著明ニ來テオル。

第三、體重ノ減少。

第四、猩紅熱樣ノ皮膚發疹。

第五、淋巴系ノ炎衝性發熱反應デ頗ル疼痛性ノ淋巴腺腫脹ヲ起シテオル。

以上ノ如キ諸現象ハ丁抹研究家ノ説ニヨレバ主トシテ結核毒ニ因スルモノデ卽チ結核菌ニ對スル「サノクリジン」ノ作用ニヨリテ大量ノ毒素(ツベルクリン)ガ一時ニ血行中ニ滲出スルカラデアル相デアル。

然シ吾人ノ見解ヲ以テスレバコレハ單ニ金屬作用デアル。ト云フノハカヽルコトハ他ノ金屬水銀、銀、鉛、砒素等ニヨリテモソノ中毒症狀トシテ見ラルル現象デ其ノ排泄所トシテ考ヘラル、腎臟胃腸粘膜及皮膚ニ於テ各症狀ガ現ハレテオル。是等ノ症狀ハ結核性病變ノ種類ヤ程度ニ無關係デ唯ダ「サノクリジン」ノ分量的竝ニ性質上ノ問題デアル。

更ニ結核病變ニ特異性ノモノデナイ證據ハ、エッペンドルフ病院ノ報告ガ裏書ヲシテオル同所デハ結核患者ナラザル手術不可能ノ胃癌患者及ビ結核性ナラザル肺炎患者ニ「サノクリジン」ヲ使用シテ同樣ノ反應ガ現ハレタコトヲ報告シテオル。

要之「サノクリジン」ナルモノハ決シテ何等特殊ノ結核治療劑デハナイ、ソノ使用ニ際シテハ須カラク本劑ノ危險性ナルコトヲ警告シ深甚ノ注意ヲ拂フ可キモノデアルト言ハザルヲ得ヌ。

尙氏ハ參考トシテ極メテ輕症ナル五名ノ閉鎖性肺結核ノミヲ選ンデ試ミタ結果モ局所所見ノ好影響ヲ見ザルノミカ、卽ツテ一般狀態ヲ惡クシタトイフコトヲ追加シテ居ル。

(佐竹)

內國文獻

結核專門外雜誌

○熱ノ病理及治療法

東京帝國大學教授　醫學博士　稻田龍吉述

「日新醫學」第十六年第四號、(大正十五年十二月發行)

本論文ハ日新醫學研修會ニ於ケル講演ヲ少シク補綴セル綜説ニシテ、(一)熱ノ定義、(二)體溫ノ調節、(三)溫ノ中樞及末梢ノ傳導經路、(四)熱ノ本態、(五)熱ヲ惹起スルモノ(六)有熱時ノ血液所見ニ就テ、(七)熱ノ意義及解熱ノ適應症、(八)治療法ノ個條ニ分テ説述セルモノナリ、今二三摘錄ヲ行フニ次ノ如シ、卽チ有熱時ノ血液所見ニ就テハ形態的變化ノ他ニ血漿ノ種々ノ變化ノ中主トシテ水分ト血液濃度、血糖等ノ關係ヲ述ベテ水分ガ有熱時ニ體內ノ組織ニ蓄積セラル、事ハ多クノ人ガ認メテ居ル所デアル、コレノ原因ニ就テモ嚴正ニ判斷スレバ不明デアル、血液濃度ニ就テハ二三ノ實驗ニヨルニ體溫ガ上昇シタ場合ハニ血液ノ蛋白濃度ガ下降スル事ハ明デアルガ有熱時ノ血液濃度ハバーボーア氏ノ言フガ如ク決シテ簡單ナル變化デハナイコト明デ著者等ハ血液濃縮ト溫度上昇トノ間ニハ一定ノ關係ヲ見出スコトガ出來ヌカラ之ニ因果關係ヲ付スル譯ニハ行カヌト思フト、血糖ニ關シテハ諸氏ノ實驗ニヨリ解熱藥投與後血糖增加ノ來ルコトハ明デアルガバーボーア氏ノ云フ如ク血糖增加ニ解熱ノ意義アルモノトハ認メ難ク溫中樞ガ刺戟セラル、時ニ同時ニ糖中樞ガ刺戟セラレテ來ル隨伴症狀デアルト考ヘル。

熱ノ意義及解熱ノ適應症ニ就テ熱ガ有害デアルカ又ハ有利デアルカノ問題ハ今日未ダ解決サレタト云フ事ハ出來ヌガ臨牀家ノ取ルベキ態度ハ種々ノ理由ヲ擧ゲテ考察スルニ次ノ如クデアル、(一)熱異常ニ高クシテ神經症狀甚シキ場合ニハ一定度マデ下ゲテ見ル、心臟ヨリノ症狀著明ナル場合ニハ解熱藥投與ハ考慮ヲ要ス、(二)食慾ガ不良ニシテ少シク熱ヲ下ゲレバ增進スルガ如キ場合ニハ一定度マデ下ゲテ見ル、併シ之ハ急性傳染特ニ腸窒扶斯等ニ於ケル規準ニシテ敗血症ノ如キハ少シ變ツタ進路ヲ取ルベキデアル、大シタ副作用ガ起ラヌバ可及的解熱藥デ熱ヲ抑ヘテ見ルト病勢頓挫シテ好都合ノ場合ガアル。

慢性ノ發熱特ニ肺結核ニ就テハ如何ナル方針ヲトルカ、各例ニヨリ異ルガ不快ナル副作用、例ヘバ高度ナル發汗、惡寒、食慾不振等ガ無ケレバ解熱藥ニヨリアル程度マデ發熱ヲ抑ヘル方ガ宜イト思フ、輕微ナ熱デモ安靜、空氣療法等ノ他ノ治療法ヲ行ヒテ下ラヌ場合ニハ一度ハ解熱劑ヲ試ムル必要ガアルト思フ、結核ノ熱ハ其儘ニシテ置イテ下熱劑ヲ與ヘヌ人ガアル、熱ヲ下ゲタ所デ疾患ガ治癒シ得ヌトノ考ヘハ尤モデアルガ、夫ハ急性ノ發熱ノ場合デアツテ慢性ノ場合ニハ出來得ルダケ熱ヲ下ゲルヤウニスルノガ第一義デアル、輕微ナル熱ガ長ク持續シテ居ルト熱ノ中樞ハ之ニ慣レルト云フノガ却々體溫ガ下ラヌヤウニナル故ニ、餘リ長ク體溫ヲ動搖セシメテ置クノハ善クナイ、下熱ニヨリテ食慾ガ佳良トナル如キ場合ニハ榮養ガ佳良トナリ、體重ガ增加シ、經過ガ良好ニナル、丁度「モルヒ子」自己ハ直接疾患ヲ治癒セシムルノ效ハ無イケレドモ、之ヲウマク利用スレバ、治癒ノ意義ヲ持ツヤウニナル、ローゼンバッハ氏ノ「モルヒ子」ニ就テ論ジテ居ル所ハ、丁度之ニ當テハメテモ良イト思フト。

治療法ニ就テ、急性ノ發熱ノ場合ト慢性ノ場合ト區別セヲバナラヌ、治療法ハ種々ノ點ニ於テ異ラザルヲ得ヌ何レカト云ヘバ慢性ノモノハ特ニ治療ガ困難デアル、(一)安靜　有熱時精神及身體ノ安靜ヲ守ルベキコトハ云フマデモナイ、コレニハ設備及注意ヲ必要トス、殊ニ肺結核ノ如ク慢性ノ熱ニナルト一般ニ患者ガ之レヲ自覺スルコトガ少ク、從ツテ守ル可キ注意ヲ怠リ易イモノデアル、斯カル場合ニハ患者ヲ自宅ニ置カズシテ療養所ニ送ルト著明ナ效果ガアルコトガアル、著者ハ再三ナラズ斯ノ如キ經驗ヲ有スト。下熱期ニ室溫及風ニ曝露スルコトヲ避ケヲバナラヌ、此時期ニハ皮膚ハ割合ニ過敏デアル。(二)榮養療法　先ヅ有熱時ノ代謝、消化器ノ分泌狀態、及運動等ノ事ヲ考ヘヲバナラヌガ消化器分泌ニ就イテ云フト唾液ノ分泌、胃ノ分泌、膵液酵素量、膽汁分泌量ノ下降等ノ點ヨリ考ヘテ有熱時ノ食物ハ消化シ易キモノデ、半流動粥狀又ハ流動物デナケレバナラヌ、而シテ新陳代謝ノ上ヨリ「カロリー」ヲ充分ニ供給シ、且蛋白モ多ク含水炭素ニ富ムデ居ラヲバナラヌ、脂肪ハ健康人ニ比シ堪ヘニクイ、食鹽ハ少シ控ヘ目ニスルコトガ良イコトガアル、「スープ」ハ鳥ノ「スープ」ガヨイ、適當ナル飲料ヲ與ヘルコトニ努メ尿量一立又ハ夫以上ニナル位ニスルノガヨイ、酒精ハ熱中樞ニ働イテ之ヲ安靜ナラシムル效ガアル併シ大量デハ之ヲ痲痹セシメテ虛脫ヲ起ス、又アル意味ニ於テハ蛋白ノ分解ヲ防グモノデアル又心臟ヲ興奮セシメ食慾ヲ良クスル働ヲ持ツテイル、然シ抗體ノ發生ヲ幾分妨ゲルトセラレテ居ル、故ニ適當量ハ以上ノ意味ニ於テ差支ナイガ個人ノ習性ヲ考ヘルコトガ必要デ昔ノ樣ニ大量ヲ用フルコトハナクナツタ、熱性病デ酒精ヲ與ヘヌ方ガヨイ場合ガアル、腦膜及腦ノ急性疾患、急性ノ心臟疾患、赤痢、腹膜炎等デアル。解熱藥ハ熱中樞ニ對シテ其興奮性ヲ抑壓シテ平靜ナラシムル痲醉藥デアツテ又大腦皮質ノ知覺ヲ安靜

ニスル作用ガアル、一方ニハ溫生成ヲ少クシ、他方ニハ溫ノ放棄ヲ盛ナラシメテ體溫ガ下降スルノデアルガ其作用方法ハ自ラ藥劑ニヨツテ異ル、從來一定ノ疾患ニハ解熱藥トシテ用ヰラル、種類ガ大凡一定シテ居ル、解熱藥ニ「ポテンチールング」ガアルカ未ダ確然ト證明セラレテハ居ラヌ、麻醉藥ノ樣ニハ行カヌガアリト考ヘラル、場合モアルバックマイステル氏ハ主トシテ肺結核ノ熱ニ就テ確ニ之アリトシテ居ル。「ピラミドン」ト「アスピリン」トノ併用ハ既知ノコトデアルガバ氏ハ「ラクトフェニン」「フェナセチン」等ノ併用モ推奬シテ居ル「ラクトフェニン」ハ「ピラミドン」ト同樣ニ用ヰラレ特ニ之ハ發汗ノ强イ場合ニハ善イトセラレテ居ル、「ピラミドン」ト「アンチフェブリン」トノ合劑ハ可ナリ强ク働クヤウニ思フ「フェナセチン」モ「エルボン」モ用フベキデアル「クリオジェニン」モ大變良ク效ク場合ガアル、「マレチン」モ長ク持續シテ用ウル事ハ出來ヌガ敗血症其他强ク弛張シ又ハ間歇スル性質ノ熱ニ時ニ應用シテ良イモノト思フ、解熱藥三回分服デ解熱ノ效明カデナイ場合同量ヲ五回ニ分服スルト效ガ現ハレル事ガアル、又發汗ノ甚シイ場合ニモ少量ヲ數回ニ分ケテ良イコトガアル、發熱前二又ハ三時間ニ一回頓服トシテ與ヘル人モアルガ著者ハ好マヌ、同量ヲ三回分服ノ方ガ效アリテ善イト思フ、解熱藥ヲ使用スル時ニ甚ダ稀ナレドモ一日中下熱シテ居ツテ急ニ惡感戰慄デ四〇度位マデ上昇シ又直チニ下ルコトガアル「アスピリン」ニ稀ニ見ルコトデ此場合ニハ他ノ弱イ解熱藥ニ代ヘレバ急ニ發熱スルコトハ止ムト。（石川）

質疑應答

問。人工太陽燈射照ノ時間ト距離ハ如何ニスベキヤ。

（愛知縣　R　K　生）

答。全身的射照ニ於テハ最初一米ノ距離デ前面背面ヲ五分間宛二回射照シ、日々施行シテ次第ニ增强シ十四日間ニ六十糎ノ距離デ四十分宛二回ニ至ラシムルトイフ記載モアルガ、私ハ通常次ノヤウナ方法ヲ標準トシ、ソレヲ場合場合ニ依テ種々ニ變更適用シテ居ル。

卽チ最初ハ八十乃至八十五糎デ三分間宛前面（腹部及脚）ト後面（前者ト同ジ高サノ背面）ヲ射照シ（合計六分間）、同距離ニテ毎日一分間宛增シテ十分間（前背兩面合計二十分間）ニ至リ、ソレヨリハ一日二分宛增シテ二十分間宛（前後兩面合計四十分間）ニ至リ、其後ハ時間ハ二十分間宛ニ止メ距離ヲ毎日二・五糎宛近ヅケテ五十糎ニ至ル。ソレ以上ハ皮膚ノ色ヲ見テ定メル、燒ケテ赤クナル者ハ中止シ黑褐色トナルモノハ可トス。堪ユル者ハ進デ三十糎ニ迄至ル。更ニ堪エル者ハ二十分間中ノ終リ二三分間ハ光ヲ增强シテ射照ス。此增强時間モ亦次第ニ增スコトヲ得。但シ四十分間全體ヲ通シテ增强スルコトハ稀ナリ。

（東京市療養所田澤錄二）